

# 地方在来品種の再商品化とその成立要因に関する研究 -札幌黄を事例として-

共生農業資源経済学講座 食料農業市場学分野  
土村茉莉奈

## 1. 背景と課題

地方在来品種は、大量・周年での生産が困難であり広域流通に適さない特徴を持つことから、戦後その生産は一時大きく減退したものの、近年地域資源の活用や差別化品目の創出といった点から再興の気運が高まっている。このように、一度減衰した農作物の再興には、既存のものとは異なる生産・販売体制の再導入・再構築をはじめとする諸要因が関係していると考えられる。そこで、地方在来品種の再商品化を可能にしている要因について、農家の生産販売対応を分析することで明らかにし、その持続性について考察することを課題とする。

## 2. 研究方法

本報告では、まず戦後の青果物市場・流通構造の展開を確認し、地方在来品種栽培の盛衰とその背景を明らかにしたうえで、行政と産地が連携して再商品化を進め、栽培が定着しつつある地方在来品種の具体的事例として、地方在来品種である札幌黄に着目し分析を行なった。事例関連主体と生産農家への聞き取り調査より、再商品化過程における生産・販売体制の変化を分析し、再商品化の成立要因を明らかにした。

## 3. 結果及び考察

第一の要因は、供給構造の変化である。再商品化の過程で農協を介した販売体制が構築されたことで、外部からの種子調達が容易になっていた。このような種子供給体制は、札幌黄再導入の障壁を緩和し、非自家採種農家の栽培を可能にしたとともに、自家採種農家にとっても補完的役割として機能していることがわかった。

第二の要因は、固定的な販売体制が再構築されている点である。各販路において販売形態の差異はあるものの、価格・販売先の変動が少ない性格であること、尚且つ札幌黄の欠点たる不均質性を許容しうる規格設定によって、一般品種と遜色ない収益性を生んでいた。

第三の要因は、生産地としての特性である。都市化進行と競合産地の台頭という状況下において、他産地と大きく差別化を図ることができる品目を望む産地側と個性品種である札幌黄を受容可能な規模と多様な販路を持つ札幌というマーケットの需要が合致していたことが成立要因の一端を担っていると考えられる。

以上3点が札幌黄再商品化の成立要因である。しかし、各要因において問題点が指摘されるように札幌黄の生産基盤は決して持続的なものであるとはいえない。とりわけ地方在来品種の種子生産が地域や農家主体から乖離することは、本来地方在来品種がもつべき地域性や歴史性といったアイデンティティを失うことにつながる可能性があり憂慮すべき問題である。